

申命記 30 : 6

コリントの信徒への手紙一 2 : 10～16

「信仰はどこから」

【前奏】

【招詞】 詩編 51 : 12～14

【祈祷】

【聖書】 申命記 30 : 6

コリントの信徒への手紙一 2 : 10～16

【説教】 「信仰はどこから」

<ただ信仰によってのみ>

わたしたちは、これまでの『ハイデルベルク信仰問答』で、「ただイエスさまを信じる、まことの信仰によってのみ、神さまの御前で義とされる」ということを聞いてきました。

「ただ信仰によってのみ、義とされる」。これを分かりやすく言い換えると、今日の間 65 にあったように、「ただ信仰のみが、わたしたちをキリストとそのすべての恵みにあずからせる」ということです。

わたしたちは、イエスさまご自身と、そのすべての恵みをわたしのものとするために。つまり、救いをいただくために。たとえ、どんなに努力して修行をしても、どんなに熱心に善い行いをしても、誰より多くの功績を積んでも、それをいただくことはできません。

それは、わたしたちが神さまに背いた罪が、あまりに深刻過ぎるからです。神さまに罪を赦していただいて、御前で義とされる、つまり、正しい、良い、と言っていたくには。わたしたちは何をしても、たとえ自分の命を差し出しても、全く足りないほどなのです。

しかし、父なる神さまは、それでわたしたちが、神さまから背いたまま、離れたまま、罪の中で滅びていくことを、良しとされませんでした。

ですから、父なる神さまは、わたしたちすべての人間のために、救いのご計画を立てて下さいました。それは、ご自分の愛する御子イエスさまをこの世に遣わし、わたしたちのすべての罪を、このイエスさまに負わせられて、すべての人間の罪の贖いとなさるご計画です。

御子イエスさまは、その父なる神さまの救いのご計画に従って、この世に来られ、ご自分の命を、わたしたちのために、十字架の上で、罪の償いのための犠牲として下さいました。

そうして神さまは、わたしたちへの愛を、イエスさまにおいて示し、この方によって、わたしたちの罪を赦し、永遠の命を与えて下さるということ、現わして下さいました。

ですから、わたしたちの救いは、この十字架と復活のイエスさまにのみ、あるのです。

ですから神さまは、イエスさまが成し遂げられた十字架と復活の御業を、わたしたちが、自分の救いのための御業であると、ただ信じ、ただ受け入れること。そのことだけを求められました。ただそのことによって、わたしたちに、救いを与えて下さる、その恵みのすべてを与えて下さると、約束して下さいました。

それが、「ただ信仰によってのみ義とされる」ということ。「ただ信仰のみが、わたしたちをキリストとそのすべての恵みにあずからせる」ということです。

信仰とは、自分の信じる覚悟でもないし、何かを悟ることでもないし、信じる思いの強さでもありません。信仰とは、ただ神さまが恵みによって差し出して下さった、イエスさまによる救いを、わたしたちが、自分の救いとして、心から受け取ることなのです。

<信仰はどこから>

では、その信仰は、どこから来るのか。それが、今日の信仰問答の最初の問いです。

わたしたちの罪を、イエスさまがご自分の命で贖って下さったという、救いの出来事。それを知り、また自分自身の救いとして受け取り、その恵みが自分のものとされること。その信仰の出来事は、具体的にどのように起こるのか、と問うています。

問 65 を見てみましょう。「ただ信仰のみが、わたしたちをキリストとそのすべての恵みにあずからせるのだとすれば、そのような信仰はどこから来るのですか。」

この問いに、ある意味、もう答えの筋道が示されています。それは、「そのような信仰はどこから来るのですか」というところです。

つまり、もうここで、信仰とは、わたしたちの内側から出てくるものではない、ということが明らかにされています。信仰は、どこかから来るもの。つまり、信仰は、わたしたちの外から来て、与えられるものなのです。

そして、答えにはこうあります。「聖霊が、わたしたちの心に、聖なる福音の説教を通してそれを起こし、聖礼典の執行を通してそれを確かにしてくださるのです。」

まず、「聖霊が」、が主語です。信仰は、聖霊なる神さまから来ます。

わたしたちの救いは、父、子、聖霊なる三位一体の神さまによる御業です。わたしたちの救いは、神から来る。その中で特に、信仰を、わたしたちの心に起こして下さいるのは。そして、その信仰を、わたしたちの内に確かにして下さいるのは、聖霊なる神さまの御業です。

今日のコリントの信徒への手紙一では、そのことが語られていました。2：10～12にはこうあります。「わたしたちには、神が“霊”によってそのことを明らかに示してくださいました。“霊”は一切のことを、神の深みさえも究めます。人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。」

神さまのを知るには、神さまから教えていただくしかありません。わたしたちがどれだけ考えても、想像しても、探求しても。造られたものであるわたしたちが、自分たちの知恵や力で、創造主なる神さまの真理にたどり着くことなど、決して出来ないのです。

しかし、御子イエスさまが世に来られ、神さまの愛を、御心を、救いを、恵みを、この世に、わたしたちに、明らかに下さいました。

そしてわたしたちが、イエスさまが明らかにして下さったことを知り、差し出された救いを、わたしのものとしていただくために、聖霊なる神さまが遣わされたのです。

2:12にあるように、わたしたちは、神さまからの霊を受けることによって、神さまから恵みとして与えられたものを、知ることが出来るのです。

<聖なる福音の説教>

さて問 65 は、そのように、聖霊なる神さまによって、わたしたちが神さまから恵みとして与えられたものを正しく知り、その恵みを信頼して受け入れる信仰を与えられるために、二つの手段が用いられることを教えています。

一つは、「聖なる福音の説教」です。聖なる福音とは、神さまの愛と、わたしたちの救いのご計画と、御子イエスさまが成し遂げて下さった救いの御業、またイエスさまご自身のことです。

ローマの信徒への手紙 10:14~17 には、このような御言葉があります。「ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。」

イエスさまが、自分の救い主であるとするためには、信じるためには、まずその方のことを聞かなければ、何も始まりません。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。まったく、その通りです。

ですから、聖霊なる神さまは、まずわたしたちに「聖なる福音の説教」を聞かせて下さいます。福音の説教とは、聖書に語られている、御言葉の解き明かしです。

わたしたちは、福音の説教を聞くことによって、神さまの愛を知り、イエスさまの救いを知り、与えようとされている恵みを知らされます。イエスさまが、まことに、このわたしの救い主である、ということを知らされます。

ここに、わたしたちが、このイエスさまの救いの出来事を、自分のこととして信じ、自分の救いとして受け入れていく心が、信仰が、聖霊によって起こされていくのです。

<聖礼典>

しかし、聖なる福音の説教によって、イエスさまを信じる心、受け入れる心が起こされたとしても。そのことを、弱いわたしたちが、頭で考え、心に思うだけでは、またすぐに疑ったり、不安になったり、揺らいだりしてしまいそうです。

そこで、問 65 の答えの 3 行目にはこうあります。聖霊なる神さまは、「聖礼典の執行を通してそれを（つまり、福音の説教によってわたしたちの心に起こった信仰を）確かにしてくださるのです。」

教会には、聖礼典と呼ばれるものがあります。先に問 68 を見ますが、そこにはこうあります。「問 68 新約において、キリストはいくつの聖礼典を制定なさいましたか。」

「答 二つです。聖なる洗礼と聖晩餐です。」

わたしたちに与えられている聖礼典は、洗礼と、聖餐です。これは、新約聖書において、イエスさまが制定なさったものです。

ローマ・カトリック教会は、聖礼典のことを「秘跡」と呼びますが、それは伝統に基き、結婚、病者の終油なども含めて 7 つもあります。しかし、プロテスタント教会では、新約聖書に基づいて、イエスさまが定めて下さった、洗礼と聖餐の 2 つだけを聖礼典としています。

この聖礼典が、福音の説教を通して、わたしたちに与えられた信仰が、まことに確かなものであるということ、はっきりと確認させて下さるのです。

この聖礼典とは何か、ということが、問 66 に語られています。「問 66 礼典とは何ですか。」「答 それは、神によって制定された、目に見える聖なるしるしまた封印であって、神は、その執行を通して、福音の約束をよりよくわたしたちに理解させ、封印なさるのです。その約束とは、十字架上で成就されたキリストの唯一の犠牲のゆえに、神が、恵みによって、罪の赦しと永遠の命とをわたしたちの注いでくださる、ということです。」

まず、先ほど問 68 でも申し上げたように、聖礼典とは、「神によって制定された」ものです。人間が考え出したものではありません。イエスさまが、わたしたちのために定め、これを行うように、と命じて下さったものなのです。

<目に見えるもの>

そして、この聖礼典は、問 66 の答えのところに「目に見える聖なるしるし」とあるように、まず「目に見えるもの」である、と語られています。

洗礼では、水が用いられます。聖餐では、パンと杯が用いられます。わたしたちが、この今生きている体で、見て、触れて、感じて、味わえる、この世の物質が用いられるのです。

先ほど、聖霊なる神さまが、信仰を与えて下さる一つ目の手段として、「聖なる福音の説教」がありました。これは、「耳で聞く神の言葉」です。これに対して聖礼典は、「目で見る神の言葉」と言われます。

福音の説教によって知らされ、聞いた、神さまの救いの恵みや、イエスさまの十字架による罪の贖いや、永遠の命の約束は、わたしたちの目には見えません。そして、この救いの恵みを、わたしたちが心から信頼し、確かに自分の救いとして受け取った、ということも、目には見えない出来事です。

しかし、その神さまの恵みは、本当に、今ここで生きるわたしに、現実には、与えられているものです。その恵みは、この世で、わたしたちがこの目で見える現実よりも、はるかに確かな、神さまの恵みの現実なのです。

でも、わたしたちは弱いので、見えないものよりも、見えるものの方が、確かなことのように感じます。目の前に実際に見える、具体的な現実が迫りくる中で、見えないものを、確かなこととして持ち続けることは、とても困難なのです。

ですから、聖霊なる神さまは、この目には見えない神さまの恵みを、聖礼典として、わたしたちの目に見えるもので現わし、与えて下さいます。そして、わたしたちが弱さの中にあつたとしても、まことに神さまの恵みを、確かなこととして、この体で受け止めさせて下さるのです。

昔の神学者アウグスティヌスという人は、聖礼典を「目に見えない恵みの、目に見えるしるし」と呼びました。目に見えない恵みの、目に見えるしるし。それが、聖礼典なのです。

<しるし、封印>

また、問 66 の答えには、聖礼典は、目に見える聖なる「しるしまた封印」である、とあります。聖礼典は、「しるしまた封印」です。「神は、その執行を通して、福音の約束をよりよくわたしたちに理解させ、封印なさるのです」とあります。

聖礼典によって、聖霊なる神さまが、わたしたちに、福音の約束を、よりよく理解させ、封印なさる。その「福音の約束」とは、聖なる福音の説教を通して聞いたことであり、答えにあるように、「十字架上で成就されたキリストの唯一の犠牲のゆえに、神が、恵みによって、罪の赦しと永遠の命とをわたしたちの注いでくださる」ということです。

これを、聖礼典によって、よりわたしたちに理解させ、封印する。

封印とは、封をしたしるしに、印を押したり、シールを貼ったりすることです。それは、その封をした人が、中身を保証することであり、それが間違いないと請け合って、そのことに対して責任を持つことです。あるいは、封印には、固く閉じる、ふさぐ、という意味もあります。また、この「封印」という言葉は、他に「確証」とか、「堅くする」と日本語で訳されたりもします。

つまり聖礼典とは、福音の約束が、確かなものとしてわたしたちにとどまるように、聖霊なる神さまが、その恵みをわたしたちに封印して下さること。わたしたちが受け取った福音の約束を、確かなものとして、神さまが目に見える方法で、保証して下さることなのです。

<神さまの確かさによる信仰>

わたしたちは、自分がしっかりと信じているなら、聖礼典はいらないのではないかと、などと言ってはなりません。自分の弱さを、罪深さを、疑い深さを、不確かさを、見くびってはなりません。聖礼典がわたしたちに与えられていることについて、カルヴァンという人は、神さまが、「私たちの弱さのための対策を講じてくださったのだ」と語っています。

神さまは、わたしたちの心が、神さまを信頼する心が、どこまでも弱く、疑い深く、また頑なで、頼りないものかを、よくご存じなのです。

だからこそ、聖霊なる神さまが、わたしたちの救いの恵みの約束を、確かなものとして、「目に見えるしるし」として、与らせて下さるのです。

そうして、福音の説教を聞くことによって起こされた信仰は、聖礼典によって、わたしたちの内に確かなものとして堅くされ、強められる。そうして、わたしたちは神さまへの信頼をますます深めて、神さまにますますより頼んで、歩いていくことが出来るのです。

ここで注意すべきことは、聖礼典の執行そのものが、信仰を与えたり、救いを与えたりするものではない、ということです。聖礼典は、わたしたちが救いをしっかり受け取り、信仰を確かにされるために、神さまが用いて下さる手段なのです。

洗礼の行為そのものが、わたしたちを救うものではありません。わたしたちは、イエスさまが与えて下さる救いを受け取る、その信仰によって救われるのであり、洗礼は、救いに与ったという目に見えない恵みを現わす、目に見えるしるしです。

また、聖餐を受けなければ、恵みをいただけないではありません。いただいている恵みを、より深く理解し、より深く受け取り、信仰をますます強められ、養われ、成長させられるために、目に見える恵みのしるしである、聖餐に与るのです。

このように聖礼典は、救いそのものではなく、救いを、福音の約束を理解させ、それを受け入れる信仰を、確かにするものです。ですから、そこにはまず、福音の約束を教える御言葉の説教がなければならぬし、聖礼典は、信仰によって、与るべきものなのです。

<イエスさまへと向かわせる>

さて、聖霊において与えられる、御言葉の説教と聖礼典は、わたしたちが主の日毎に与っている礼拝の中心となっているものです。そして、これらのことは、すべて十字架のイエスさまへと、わたしたちを向かわせます。

そのことが問 67 で確認されています。「問 67 それでは、御言葉と礼典というこれら二つのことは、わたしたちの救いの唯一の土台である十字架上のイエス・キリストの犠牲へと、わたしたちの信仰を向けるためにあるのですか。」

「答 そのとおりです。なぜなら、聖霊が福音において教え、聖礼典を通して確証しておられることは、わたしたちのために十字架上でなされたキリストの唯一の犠牲に、わたしたちの救い全体がかかっている、ということだからです。」

わたしたちの救いは、わたしたちのために十字架上でなされた、キリストの唯一の犠牲にのみあります。わたしたちの功績や、善い行いによるのではなく、わたしたちのために命を捨てて下さった、苦しみを受けて下さった、神に呪われた死を死んで下さった、このイエスさまに、わたしたちの救い全体がかかっています。

ですから、礼拝において、御言葉と聖礼典は、常に、この十字架の贖いを成し遂げられたイエスさまへと、わたしたちを向けさせます。ここにしか、救いはない、ということを告げ、ここにこそ救いがある、ということ、確信させるのです。

わたしたちは、礼拝において、聖霊のお働きの内に、福音の説教を聞くたびに、聖礼典に与るたびに、十字架のイエスさまを指し示され、この方が成し遂げて下さった救いを、ただ受け入れること。ただ信仰によってのみ、このイエスさまに、イエスさまのすべての恵みに、与らせていただけることを、確信をもって、繰り返し覚えさせられるのです。

わたしたちの弱さを、疑い深さを、心の頑なさを、神さまは、本当によくご存じです。

しかしだからこそ、神さまは、ただ恵みによって、わたしの何の功績もなしに、イエスさまの救いの恵みを与えて下さいました。

そして、わたしたちが、その恵みを素直に受け取り、神さまの確かさにこそより頼むことが出来るように、わたしたちの信仰のために必要なことを、すべて備えて下さいました。

わたしたちは、聖霊が御言葉の説教において教えて下さる、イエスさまの救いを、福音の約束を聞き、ただ感謝して受け取ります。そして、聖霊が聖礼典によって、そのイエスさまの救いの恵みを、わたしたちに確信させて下さり、神さまこそが、わたしたちにとって、まことに確かな、まことに信頼すべき、まことにより頼むべき方であることを、保証付きで、確証して下さいます。

わたしたちはただ、ひたすらわたしたちを、どのような方法を用いてでも愛し抜き、守り通して下さい、父、子、聖霊なる神さまの御許で。神さまの御手によって信仰を守られ、支えられ、強められて、神さまと共にある喜びの命を、与えられた信仰を、生きるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま わたしたちを愛して下さい、憐れんで下さり、感謝いたします。

あなたがお遣わし下さった、御子イエスさまの十字架の贖いと、復活の命に、わたしたちの救いのすべてがかかっています。その福音の約束を、聖霊なる神さまが、礼拝における御言葉によって、わたしたちに教えて下さり、また聖礼典によって、まことに確かなこととして、わたしたちに受け取らせて下さいます。どうか、与えて下さるすべてのことを、わたしたちが、謙虚に、誠実に、感謝をもって受け取ることが出来ますように。

そして、ますますあなたを愛し、賛美し、御心に従う者とならせて下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 3 4 1 「来たれ聖霊、わが主」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】 【主の祈り】

【讚美歌】 2 4 「たたえよ、主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン